

## 0.1 R6 数学 A

[1] (1) 一様収束であるから,  $\forall \varepsilon > 0, \exists N \in \mathbb{N}, \forall n \geq N, \sup_{x \in [a, b]} |f(x) - f_n(x)| < \varepsilon$  となる.  $f(x)$  は連続であるから可積分である.

$$\left| \int_a^b f(x) - f_n(x) dx \right| \leq \int_a^b |f(x) - f_n(x)| dx \leq \int_a^b \varepsilon dx = \varepsilon(b-a) \rightarrow 0 \quad (n \rightarrow \infty)$$

$$\therefore \lim_{n \rightarrow \infty} \int_a^b f_n(x) dx = \int_a^b f(x) dx$$

(2)  $x \in [a, b]$  に対して  $0 < g(x) < 1$  であるから,  $\sum_{k=0}^{\infty} g(x)^k$  は収束する.  $g(x) := \lim_{n \rightarrow \infty} \sum_{k=0}^n g(x)^k$  とする.  $g(x)$  は有界閉区間上の連続関数であるから,  $\forall x, g(x) < M < 1$  となる  $M$  が存在する.

$$\left| \sum_{k=0}^n g(x)^k - g(x) \right| = \left| \sum_{k=0}^n g(x)^k - \sum_{k=0}^{\infty} g(x)^k \right| = \left| \sum_{k=n+1}^{\infty} g(x)^k \right| \leq \frac{g(x)^{n+1}}{1-g(x)} \leq \frac{M^{n+1}}{1-M}$$

$$\sup_{x \in [a, b]} \left| \sum_{k=0}^n g(x)^k - g(x) \right| \leq \frac{M^{n+1}}{1-M} \rightarrow 0 \quad (n \rightarrow \infty)$$

より一様収束.

(3)  $1 \leq x \leq 3$  のとき,  $0 < \frac{x}{1+x} < 1$  であるから,  $\sum_{k=0}^{\infty} \left( \frac{x}{1+x} \right)^k$  は  $\frac{1}{1-\frac{x}{1+x}} = 1+x$  に一様収束する. したがって

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \int_1^3 \sum_{k=0}^n \left( \frac{x}{1+x} \right)^k dx = \int_1^3 \lim_{n \rightarrow \infty} \sum_{k=0}^n \left( \frac{x}{1+x} \right)^k dx = \int_1^3 1+x dx = 6$$

[2] (1)  $\lambda$  に対応する固有ベクトル  $v \in V \setminus \{0\}$  をとる.  $Tv = \lambda v$  である.  $T^2v = T(Tv) = \lambda Tv = \lambda^2 v$  であるから,  $\lambda^2$  は  $T^2$  の固有ベクトルである.

(2)  $T^k = 0$  とする.  $T$  の固有値  $\lambda$  に対して (1) と同様にして  $\lambda^k$  が  $T^k$  の固有値であることがわかる. 零写像の固有値は全て零であるから,  $\lambda^k = 0$  である. よって  $\lambda = 0$  である.

(3)  $F = \mathbb{C}$  より  $V$  は  $T$  の広義固有空間に分解できる.  $T$  の固有値は 0 のみであるから,  $V$  が  $T$  の広義固有空間である. すなわち  $V = \{v \in V \mid \exists n, T^n v = 0\}$  である.  $V$  の基底  $\{v_1, \dots, v_n\}$  に対して,  $T^n v_i = 0$  となる  $n$  をそれぞれ  $n_i$  とする.  $N := \max\{n_1, \dots, n_n\}$  とすれば,  $T^N = 0$  である.

(4)  $A = \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ -1 & 0 \end{pmatrix}$  とすれば,  $f(x) = Ax$  で定まる線形写像  $f: \mathbb{R}^2 \rightarrow \mathbb{R}^2$  は  $\det \begin{vmatrix} 0-\lambda & 1 \\ -1 & 0-\lambda \end{vmatrix} = \lambda^2 + 1 = 0$  であるから, 0 以外の実数を固有値にもたない.  $A^2 = -E$  であるから,  $f$  はべき零でない.

[3] (1) 成立.

(2) 成立.  $f(K)$  が連結でないと仮定する.  $f(K) = (U \cap f(K)) \cup (V \cap f(K)), (U \cap f(K)) \cap (V \cap f(K)) = \emptyset, (U \cap f(K)) \neq \emptyset \neq (V \cap f(K))$  となる  $Y$  の開集合  $U, V$  が存在する.  $(f^{-1}(U) \cap K) \cup (f^{-1}(V) \cap K) = K, (f^{-1}(U) \cap K) \cap (f^{-1}(V) \cap K) = \emptyset, (f^{-1}(U) \cap K) \neq \emptyset \neq (f^{-1}(V) \cap K)$  である.  $K$  が連結であることに矛盾.

(3)  $K \cap A$  の任意の開被覆  $S = \{U_\lambda\}_{\lambda \in \Lambda}$  を任意にとる.  $S' = S \cup \{X \setminus A\}$  とする.  $S'$  は  $K$  の開被覆であるから有限部分被覆  $\{U_{\lambda_1}, \dots, U_{\lambda_n}, X \setminus A\}$  が存在する. よって  $\{U_1, \dots, U_n\}$  が  $K \cap A$  の有限部分被覆であるからコンパクト.

[4] (1)  $f$  が  $a$  で正則であるから, ある  $a$  の  $\varepsilon$  近傍で  $f(z) = \sum_{n=0}^{\infty} c_n(z-a)^n$  とできる. 一様収束しているから,  $f'(z) = \sum_{n=1}^{\infty} n c_n(z-a)^{n-1}$  である. よって  $f'(a) = c_1$  である.

$\frac{f(z)}{(z-a)^n}$  の  $z = a$  における留数は  $\frac{f(z)}{(z-a)^n}$  のローラン展開が  $\sum_{k=-2}^{\infty} c_k(z-a)^{k-2}$  であるから  $c_1$  である. よって

留数は  $f'(a)$

(2)  $(z^2+1)^2 = (z-i)^2(z+i)^2$  である. よって極は  $z = i, -i$ .  $\frac{e^{iz}}{(z+i)^2}$  は  $z = i$  で正則であるから,  $\frac{e^{iz}}{(z-i)^2(z+i)^2}$  の  $z = i$  における留数は (1) より  $\frac{d}{dz} \frac{e^{iz}}{(z+i)^2} \Big|_{z=i} = \frac{1}{2ei}$  である. 同様に  $z = -i$  における留数は  $\frac{d}{dz} \frac{e^{iz}}{(z-i)^2} \Big|_{z=-i} = 0$  である.

(3)

$$\left| \int_{C_R} \frac{e^{iz}}{(z^2+1)^2} dz \right| \leq \left| \int_0^\pi \frac{e^{iRe^{i\theta}}}{(R^2e^{2i\theta}+1)^2} Rie^{i\theta} d\theta \right| \leq \int_0^\pi \left| \frac{e^{-R\sin\theta}}{(R^2-1)^2} \right| d\theta = \frac{\pi}{(R^2-1)^2} \rightarrow 0 \quad (R \rightarrow \infty)$$

(4)  $R_1, R_2 > 1$  に対して,

$$\begin{aligned} \left| \int_{R_1}^{R_2} \frac{\cos x}{(x^2+1)^2} dx \right| &\leq \int_{R_1}^{-1} \frac{1}{(x^2+1)^2} dx + \int_{-1}^1 \frac{1}{(x^2+1)^2} dx + \int_1^{R_2} \frac{1}{(x^2+1)^2} dx \\ &\leq \int_{R_1}^{-1} \frac{1}{x^4} dx + \int_{-1}^1 \frac{1}{(x^2+1)^2} dx + \int_1^{R_2} \frac{1}{x^4} dx \rightarrow 0 \quad (R_1, R_2 \rightarrow \infty) \end{aligned}$$

よって広義積分は収束する. 留数定理から  $\int_{-\infty}^{\infty} \frac{\cos x}{(x^2+1)^2} dx = 2\pi i \frac{1}{2ei} = \frac{\pi}{e}$  である.